新潟県の限界集落活性化に取り組む　経営・森本ゼミ

演劇祭運営 活動広げる

ゼミ生と茨平の人々が一緒に花を植える

新潟県の限界集落の活性化に取り組んでいる経営学部の森本祥一ゼミ（14人）が、活動の場所を広げた。8月15日（水）に同県十日町市茨平集落で開催される「あざみひら演劇祭」を盛り上げようと運営を担い、地区の人々や県外からのプロジェクトメンバーとともに奮闘している。森本ゼミ生は「演劇祭を成功させ、ゼミ活動のヒントを見つけたい」と意欲を燃やす。

棚田が広がる茨平集落

あざみひら演劇祭は、美術や演劇を学ぶ学生や県内のアーティストが地元の人たちと交流しながら芝居を創り上げていく茨平の恒例夏行事。2010年から東京芸術大学の日比野克彦教授（現代美術）がプロデュースしている。今夏は県南で催される3年に1度の「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2018」の一環として開催されるため、上演団体を公募して実施する。

森本教授は今年4月から日比野研究室で国内研究を行っており、森本ゼミも運営に関わることになった。5月26日にはゼミ生、森本教授が現地の人々と一緒になって野外劇場の土台作りを行った。会場は休耕田で、成人の背丈ほどの雑草がびっしり生えていたが、数時間で草を刈り整備した。

また4、5月の2日間、廃校となっている近くの小学校で、ロープ張りと西洋朝顔を植えた。ロープ張り作業日は雨の中実施された。演劇祭開催日を満開の朝顔で迎え祭りに花を添えようと、雨と汗をぬぐいながら頑張った。ゼミ生はその後も茨平を月に数回訪ね、劇場の整備に励んでいる。

森本ゼミは2014年新潟県から限界集落活性化事業を受託し、南魚沼市辻又の人々と交流を持ち、辻又特産のコシヒカリを売り出すブランド戦略や、古民家を生かす活動に取り組んだ。フレッシュな感性でのチャレンジを記録書『大学生、限界集落へ行く』に集約、昨年、第1回食生活ジャーナリスト大賞を受賞した。

森本教授は辻又での新たなステップを模索していたところ、同じ新潟県で「アート」を軸に集落活性化に取り組む日比野教授の活動を知り注目、日比野研究室を国内研究先に選んだ。

辻又から西に約40キロにある茨平は世帯数約20、人口は100人足らずで15世帯50人未満の辻又とよく似ているほか「棚田でおいしいコメができることなど共通点が多い」と森本教授。また「辻又に比べ若い住民が多い。アート活動が地域に根付き若者が担い手になっているのでは」とみている。

茨平では、芸大生と地域のボランティアが中心になってコミュニティー紙「明後日（あさって）新聞」を発行しており、住民に好評だ。

「明後日新聞」編集長、芸大大学院生の中村暁華音さんは「森本ゼミ生は集落の人々と積極的にコミュニケーションを取り、作業中も笑い声が響いていた」とゼミ生の雰囲気づくりをたたえた。

森本ゼミの秋山美乃理さん（経営4）は山梨県の身延町出身。「卒業した小学校、中学校が廃校になり、地元を盛り上げるにはどうしたらよいかと森本ゼミに入った。ゼミ活動の中で、活性化には現地の人々との関係性をつくることが重要だと学んだ。あざみひら演劇祭の開催まであとわずかだが、地元の人々と一緒になって盛り上げたい」と語った。

法学部140回連続講演会　弁護士がやりがい語る

創立140年に向けて法学部が開催している140回連続講演会が100回を超えた。

講演会は2015年9月にスタート。法学部や法科大学院の教員、卒業生らが身近な問題から政治まで多彩なテーマを取りあげてきた。6月22日は99回と100回合同開催で「弁護士に会ってみよう」と題して、東京弁護士会の若手弁護士5人が登壇。パネルディスカッション形式で、仕事の内容ややりがいについて語った。

5人はそれぞれ刑事、民事、企業法務、企業内弁護士、行政勤務経験と多様な専門性を持つ。このうち染谷隆明さん（平19法、平21法科大学院）は消費者庁で景品表示法の改正に携わり、現在は法律事務所で企業の広告規制などを多く扱っている。「いつも自分のやりたいことを追求してきた」と仕事のやりがいについて語った。

スマートフォンを利用して、授業内でアンケートに回答するアプリケーション「respon（レスポン）」を利用して、参加者にアンケートを実施。結果に基づいて、休みの過ごし方や、司法試験への勉強方法などについて答えた。

弁護士の役割について語る染谷さん（左）＝6月22日

司会の永井太丸さん（平24法科大学院）、大門誉幸さん（平19法科大学院）は「弁護士だけでなく、法律に関わる仕事を目指してほしい」と呼びかけた。

今年度の連続講演会では国際法や夫婦別姓訴訟、地方議会の役割などを取り上げている。第89回（5月15日）は棟居快行法科大学院教授が「政府の憲法解釈」と題して講演。第95回（6月8日）は元栃木県警察学校長の細谷芳明さん（平28院法修）が児童虐待防止策の現状を捜査機関の関与の視点から解説した。

校友 上田さんが特別講義　経営・流通論

写真＝

経営学部・田口冬樹教授の授業「流通論」の一環として、外部講師を招いて行われる特別講義が7月5日、生田キャンパスで行われた。今回は鳥取県赤碕ダイハツ有限会社代表取締役社長の上田啓悟さん（平7経営）＝写真＝が「経営や流通につながる街づくり活動地域と関わり地域とともに生きる」をテーマに、地方都市の再生法について自らの体験を話し、約300人の学生は熱心に聴講した。

上田さんは大学卒業後、家業を継ぐため故郷である鳥取県の赤碕町（現琴浦町）に帰った。当時、大型スーパーの進出、インターネットの普及などで地元の商店街は寂れる一方。2011年には山陰道東伯・中山道路が開通し、並行する国道9号は交通量が激減。深刻な状況に陥った。

地元商店街の人たちと知恵を絞り、街に人が訪れる仕掛けを考えた。地元の人には見慣れた風景だった「鳴り石の浜」に着目。鳴り石は全国のどこにもなく、波とともにカラコロと鳴る石の音は心を落ち着かせる。また、「よく鳴る」を「よくなる」、「良く成る」にかけ、願いごとがかなうパワースポットと紹介したところ、たちまち多くの人が訪れるようになり、地域、商店街に活気が戻った。浜を舞台にさまざまな活動を展開し、一昨年、総務省の「ふるさとづくり大賞」（団体賞）に「家族、仕事、地域の活動を両立させるのは大変だが、覚悟とやる気をもって挑めばうまくいく。街づくりは自分の仕事にも必ず役立つ」と上田さんはアピールする。

就職を控えた学生からは故郷で仕事をすることの利点などについての質問が相次いでいた。

法・森住准教授に相馬学術奨励基金

本学を卒業した専任教員を学術の研究調査などのために海外に派遣する相馬学術奨励基金の2018年度の海外研究員に森住信人法学部准教授（平18院法博）＝写真＝が決まった。森住教授は9月10日から1年間、ドイツのマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクで刑法理論の日独比較研究を行う。

訃報

井下武厚氏（いのした・たけあつ）名誉教授。元経営学部教授

7月3日、92歳で死去。1956～96年在職。専門は会計学。

今村明氏（いまむら・あきら）元野球部監督

7月3日、74歳で死去。1979～83年、97～99年監督を務め、東都大学リーグで2度のリーグ優勝に導いた。

専修人の新しい本

ホロコースト表象の新しい潮流 ―ユダヤ系アメリカ文学と映画をめぐって

坂野明子共著

本書は2013年から3年間にわたって「21世紀のホロコースト表象」というテーマで科研の助成を受け、研究を重ねてきた成果として出版されたものである。

アウシュヴィッツ解放から73年、戦後生まれのユダヤ系アメリカ作家たちにとっては、時間的にも地理的にも遠く離れた事象でありながら、ホロコーストはアイデンティティーにも関わる大きな問題だった。本書では、アメリカにおけるホロコースト受容の歴史やイスラエルの政治利用などの時代状況も絡めながら、各作家のホロコースト表象を検証している。

なお、近年はヒトラーやホロコーストを扱った映画が数多く制作されているが、そこから見える新しい傾向についての詳細な論考も含まれている。（彩流社、本体3000円＋税）

著者（さかの・あきこ）＝文学部教授。アメリカ文学。他の著者は▽佐川和茂青山学院大名誉教授▽大場昌子日本女子大教授▽伊達雅彦尚美学園大教授。

言葉の魂の哲学

古田徹也著

あたかも魂が入ったかのように、言葉が生き生きとした表情を持ち始める瞬間。あるいは逆に、言葉から表情が急に失われ、魂が抜けたように感じる瞬間。本書は、そうした体験のもつ言語実践上の意味と、その社会的な重要性を探っている。

まず、第1章で取り上げられるのは、中島敦の『文字禍』と、ホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』という2編の小説である。そこで浮上する論点を踏まえて、続く第2章と第3章では、ウィトゲンシュタインとカール・クラウスの特異な言語論がそれぞれ詳しく跡付けられている。

以上の探究を通じて本書は、言語をめぐる意外な論点を指摘し、同時に、言語を用いて生活する私たちの社会にとって重要な、一個の倫理の存在を明るみに出している。（講談社選書メチエ・本体1700円＋税）

著者（ふるた・てつや）＝文学部准教授。哲学・倫理学。